

10年目を迎えて

事務局

平成14年9月にNPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク（自然博ネット）の設立総会が開催され、翌15年2月に正式にNPO法人として認可されてから、今年で10年目になります。そしてNPOの前身である、静岡県立自然史博物館設立推進協議会（自然博推進協）を発足させたのが平成7年4月ですから、博物館設立のための運動を開始してから、17年が経過したこととなります。ここで、これら私たちの静岡県立自然史博物館設立のための長い活動経過を、少し振り返ってみることにしましょう。

自然博推進協では、発足後に県に対して積極的に、自然史博物館建設の要望書や提案書を提出し、県も新世紀創造計画に自然系博物館の必要性を位置づけしました。その後、県では自然系博物館構想検討費が平成8年度から11年度まで4年間に渡って予算に計上され、県内の標本資料所在調査や資料・文献調査などが行われました。しかしながら、バブル崩壊とともに、県の財政がひっ迫したこともあり、検討費は0査定となり、博物館構想も消えそうになりました。

その間、推進協では、調査に協力するとともに、総会ごとに各地の博物館関係者に特別講演を依頼など着実に活動してきました。

平成13年6月、県では静岡県自然学習・研究機能調査委員会を発足させ、検討会を実施すると共に、博物館の必要性について県民アンケートを実施し、その結果県民ニーズがあるとの意見を付けて、委員会では調査報告書を平成14年10月に知事あてに提出しました。ここでは、博物館設立にあたっては2段階方式とし、第1段階として散逸する危惧のある標本・資料の収集・整理、スタッフの充実と人的資源の活用、調査研究・情報集積の推進、インターネットを使った収蔵標本や調査資料等の公開、プレ博物館活動と県民意識の醸成、第二段階の実施計画の策定準備などが挙げられ、その中で

もまず緊急事業として散逸する危惧のある標本を収集保存することから始めることを提案しました。これを受けて県は平成15年より、自然学習資料保存事業を予算化。これに協力するためもあり、推進協はNPO法人化して協力体制をとることとなりました。

この県による自然学習資料保存事業は、NPO自然博ネットが受託し、現在まで10年間にわたって継続してきました。最初は三島の教育委員会分室で始められた保存事業ですが、平成17年より清水区辻の現在地に移転しました。その間、博物館設立の次の段階にはなかなか進みませんでした。平成21年に川勝現知事に代わってから、企画部の積極的な対応もあり、博物館構想は進展を見せ始め、ついに平成26年度から現在の静岡県立静岡南高校の校舎への移転計画が現実のものとなり、静岡県立自然史博物館設立へ向けて大きく前進しそうです。

思えば、この長い年月の途中では、県立自然史博物館設立についての話がなかなか進まず、博物館設立については何度も活動をあきらめかけた時期もありました。また、その間に、県立自然史博物館設立を誰よりも強く望んでおられた推進協代表の伊藤二郎先生とNPO自然博ネット初代理事長の池谷仙之先生が逝去されました。しかし、今、私たちはこれまでの活動を、両先生とともにしっかりと継続できて良かった、と実感しています。本当に「継続は力なり」です。

今、私たちは望んでいた静岡県立自然史博物館設立への実際の道の始まりにいます。実際のところ、これからさらに何年かかるかもわかりませんが、この実際に敷かれつつあるレールの上を、具体的に着実に進んでいきたいと思えます。みなさんには、これまでご協力ご支援いただきましたが、これからも、博物館設立のために、ご協力をよろしくお願いいたします。

総会記念講演

「自然好きの子供を育てるために」

奥本大三郎（NPO日本アンリ・ファール会理事長）

要約：清 邦彦



奥本大三郎氏

これ何の風景かと申しますと、南フランスの郊外に出た所のごく普通の景色です。真ん中にオリーブの木がありまして、ヒナゲシがいっぱい咲いております。

これがフランスですね。ここが北海道の最北端と同じで、いかに北にあるか。でもメキシコ湾流という暖流が流れているので北にある割には暖かい。ただし緯度が高いから、夏は早く夜が明けて、夜9時ぐらゐまでチョウチョが飛んでいる、そういう所ですね。

ファールは、こここのモンペリエという地中海沿岸の町から100キロほど入ったサンレオンという小さな村に生まれました。人口は300人ぐらゐなんですけど巡礼の通り道なので割合交通の要所であったと言われてます。おじいさんは広い土地を持ってたんですが、父親は土地を持たない百姓で、大変貧乏でした。

このローヌ川というのは重要な川でして、アルプスの雪解け水が流れてくる。夏は非常に乾燥してる、秋になると大雨が降る、いわゆる地中海性気候ということですね。ここがプロヴァンス地方ですね。ここに乾燥地を好む糞虫なんかいてウシの糞ヒツジの糞に来る。大きなウシの糞なんかドーンとあると、いっぱい飛んで来ます。昔は糞虫が多くて、自動車のない時代のエネルギーはすべて草ですからね、ウシが食べて糞をする、ヒツジが食べて糞をする、それにいろんな糞虫が寄ってた



スカラベサクレ

かってきます。

この一番大きいのがスカラベサクレ、こういうのが主にいて糞を食べます。敏感なアンテナを持っておりまして、糞が新鮮なうちに飛んで来て糞の玉を切り出すんです。転がして行って丸くするのかと思っていたらそうではなくて、初めから球形にきれいに切り取る。そして表面を整えます。で、転がしてく。こういうふうには後ろ足で転がし、前足でイチニ、イチニとやる。その前足は切り出すのに、氷屋さんのノコギリみたいに粗い歯が付いている。頭の部分にもノコギリのような鋸歯がついていてスコップのような役割をしている。体全体が糞を切り出して、運ぶように、転がしてゆくように出来ています。

ファールはその転がしてゆく糞の中にスカラベの卵が入ってると思ってたんですね。ある時羊飼いの青年がこういうものを見つけたと言って、西洋ナシ型の糞を持ってきた。卵はその真ん中にあるんじゃないで、突出した乳首のような所にある。先は植物の繊維が粗く組んである、つまり卵も呼吸をしたり水分を吸収したりしている。それをふさいでしまると卵が死んでしまいます。孵化した幼虫は中を食べつくすとこういう幼虫になります。そしてエジプト人が見たらミイラかと思うよ

うな蛹になります。この時期、育児玉の表面はカチンカチンです。そのままだといくら背中で押しても割れません。ところが九月に雨が降る、その雨でしっとり濡れて、ちょうど割れるんですね。エジプトの場合はその頃ナイル川が氾濫をする。そしてその糞の玉は表面が柔らかくなって、成虫は外に出ることができる。

ファールのもうひとつの重要な研究は狩りバチの研究です。

タマムシツチスガリと言うハチがいて、タマムシを獲物にして幼虫の餌にする、レオン・デュフルという人がハチがもぐっていった所を掘ってみると、タマムシの残骸がいつか出てきた。それをハチの幼虫が食べてる。彼は、ハチは特殊な防腐剤をタマムシに注射する、だからいつまでたっても餌のタマムシは腐らない、幼虫は新鮮なタマムシを食べることが出来ると考えました。

それを読んでファールは、昆虫の研究にはただ分類するだけではなくて、生態研究という分野のあることを知ります。そして自分の地方にいる別の種類のツチスガリでやってみました。ゾウムシを狩るハチの仲間です。こうやって崖の所に穴を掘って、巣の中にゾウムシをたくさん捕まえてきてはしまっておく。で、卵を生みつける。ハチの幼虫はゾウムシを食べて育つ。死んだゾウムシを防腐剤で腐らないようにしているのか、電気を通して見たところ、生きてる虫の反応があったんですね。ゾウムシが生きていたことがわかりました。

で、なんとかしてハチがゾウムシを刺す瞬間を見たいとファールは思うんです。ハチが獲物を持ってきて穴を掘ってる時に、ハチが麻痺させたゾウムシと、生きてるゾウムシを入れ替えます。ハチは麻痺させたと思ったのにまだ生きてるものですから、またゾウムシを刺すんですね。胴体の下の部分、よろいの合わせ目みたいな薄い膜があります。そこを開いてチクツと刺す、そうすると一瞬でゾウムシは動けなくなる。あの部分に運動神経がかたまってるんですね。しかし内臓など他の部分はそのままです。ハチの幼虫は生きて獲物を食ってる、新鮮そのものなんです。

ファールの昆虫記の中から二つだけ選ん

でお話しました。

標本の大切さってことがありまして、標本箱に1匹あればいいじゃないか、オスメス1匹ずつ採ればいいんじゃないかとも言われますが、個体変異というものもありますし、どこの場所で誰が採ったかというきちんと記録した標本がたくさんあるほどよい。同じ種類だと思って採らないでいたチョウチョがあとで別種だとわかったことがあった。採ってみたいとわからない。

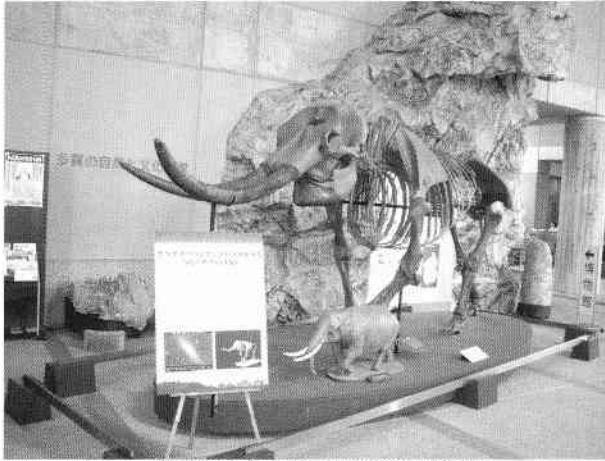
観察、観察と言うけれど、採らないで殺さないで見ましようと言いますが、子どもを連れて行って観察させても十分ぐらいで飽きちゃうんですよ。やっぱり捕虫網持たせて、採ってこいというみんな必死になって採りますし、それでいいのを採ると感動したりします。まず最初はその採る感動からです。そして標本作らせると、体の構造がよく分かります。それから、データつきの標本というのは、その頃にはこんなにこれらのチョウチョがいたんだという、論より証拠なんです。それを分析してみたりしているいろいろわかるわけです。標本というのはどんなボロでもたくさんある必要はあるんです。

大英博物館の標本、オランダのライデンとか、パリの博物館とか、ヨーロッパの標本があるために分類学というものが非常にはっきりするわけですね。日本でも日本のタイプ標本くらいは集めたいんですけど、たとえば蛾の井上寛先生、日本の蛾を集めて、その基準になるタイプ標本を日本の博物館が収容してくれないもので大英博物館に渡した、そういう文化国家として「どこに出しても恥ずかしい話」があります。資源ナショナリズムというものを日本では大事にしてないです。

昆虫採集は子供が自然に一番最初に興味を持つ元になると思うんですね。昆虫を採ると減るじゃないかと言う言い方もあります。1匹採ったら1匹減ると。昆虫の場合は、鳥や哺乳類と違って復元力がすごいです。

黒いチョウチョが飛んできた、あれはナガサキアゲハだ、あれがいかにもすごいことか、ポンとわかるような子どもになってくれないかと、日本アンリ・ファール会というものを作りました。やっぱり虫そのものが好きになるのが一番、学問の正当な道だと思っています。

博物館紹介
あけほのパーク多賀・多賀町立博物館
横山謙二



アケボノゾウの骨格復元模型



きちんと整理された骨格標本



阿部勇次学芸員



剥製標本も種類が豊富

3月4日、兵庫県立大学に研修を受けに行く途中で、多賀町立博物館を見学してきました。多賀町は、琵琶湖の東部、彦根市の近郊にあり、イザナギ・イザナミの2大神を祀る多賀大社を中核として発展した歴史のある町です。「あけほのパーク多賀」とは、町立の公園、総合博物館、図書館・文化財センターの複合施設の名称です。「あけほのパーク多賀」の名は、多賀町の工業団地の造成工事現場で発見された象の化石「アケボノゾウ」に由来しています。このアケボノゾウの化石は、ほぼ全身骨格がそろっており、全国でも最も保存状態の良いことで知られています。博物館は、このアケボノゾウなどの化石を町の施設で保存し公開するために平成11年3月に開館しました。現在、学芸員は2人しかいませんが、町立とは思えない立派な施設です。

今回の博物館見学で案内してくれたのは、こ

の博物館の阿部勇次学芸員です。実は阿部学芸員とは、大学のころからの友達で、学生時代はよく化石採集に出かけた仲間です。

阿部学芸員の案内で、まず展示室を見学しました。この博物館の目玉はやはり、アケボノゾウの化石です。博物館入口のエントランスホールには、実物大骨格復元模型が展示され、その向かいの中庭には、見つかった状態を再現した模型が展示してあります。また、展示室にも、アケボノゾウが産出した地層と産出化石の展示コーナーが広くしめていました。その他、地域に分布する石灰岩地帯の地形と化石、動植物などを紹介するコーナー、土器などの遺物なども展示してありました。

次に、標本室などのバックヤードを案内してもらいました。バックヤードは、液浸標本室、乾燥標本室、文化財系の資料室、書庫、研究室、



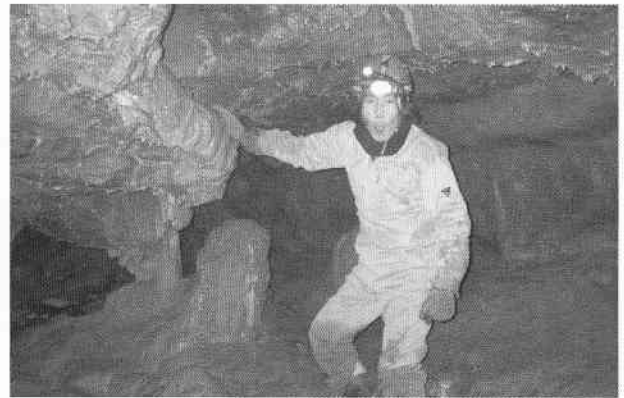
実験室にもシカの骨



冷凍庫も動物の死骸で満杯



骨だらけの机 実験室



鍾乳洞に連行された筆者

展示準備室、実験室などがあります。町立でここまで、施設が充実している博物館も珍しいのではないのでしょうか。はじめに案内してもらった、乾燥標本室には、阿部学芸員が、ほぼ一人で集めた骨格標本や剥製標本がたくさんありました。テン、キツネ、ニホンジカなど、身近にいる動物は、何でも標本にしているようです。その他、モグラやコウモリの剥製や動物の足型まで標本にしていました。また、脊椎動物だけでなく、身近な昆虫標本のほか、小さなゴミムシ、ダニまでも標本にしていました。標本を見ていると、とても一人の人間が集めた標本とは思えません。学生の頃も、化石の他、いろいろなものを収集していましたが、さらにパワーアップしたようです。その後、バックヤードの各所を見学しましたが、どの部屋にも、整理途中の骨格などの標本がたくさん見られ、また冷凍庫の中には、まだ処理していない動物の死骸がぎっしり詰まっていました。

見学を終え、博物館の仕事終了後、阿部学芸員より、ヘルメット、ライト、つなぎ、穴のあいた長靴を装備させられ、日が沈む中、真暗な山中を歩き川を渡り、山の中の鍾乳洞に連れて

いかれました。この鍾乳洞の奥には、たくさんのコキクガシラコウモリがいました。どうやら、阿部学芸員はコウモリの移動追跡調査をしにきたようです。専門外のこんなことまで、やっているのかと思いましたが、話を聞いてみると最近では、コウモリの調査の方が専門になって来ているようです。

こうして、博物館の見学とともに、貴重な体験をすることができました。今回の見学では、地元から産出した全国的に貴重な標本が地元管理で保存され、教育に活かされる施設の必要性を感じました。静岡県にも、全国的にも貴重な脊椎動物化石が産出しています。しかし、これらの化石は、他県の博物館で保存されていることが多く、また個人所有や学校で保管されていることもあり、さらには所在がわからなくなった標本も少なくありません。そして、これから静岡県が、発展し開発が進むにつれ貴重な化石が産出する可能性もあります。こうした貴重な標本を失わないように、標本を保存していくための施設とその標本の研究と普及教育を行える人材は必要不可欠です。

タイリクバラタナゴ

秋山信彦



闘争行動をしているタイリクバラタナゴ

タナゴの仲間、都市開発や環境の著しい変化によって各地で激減している。その中で、最もよく見られる種類が皮肉なことに外来種であるタイリクバラタナゴである。現在日本に分布しているものは、1940年頃に中国の長江から利根川に移入したハクレンに混入して持ち込まれたと言われている。

タナゴの仲間は、生きた二枚貝に卵を産み付けるという変わった産卵習性の持ち主である。雌は卵が成熟して排卵されると、同時に産卵管という管が伸びる。二枚貝を中心として雄は縄張りを張っているが、産卵可能な雌だけは縄張り内に誘い込む。二枚貝が出水管を良く開いている時に雌は、産卵管を二枚貝の出水管から貝の体の中に差し込み、鰓の構造物へ卵を産み付ける。この行動は遅いと二枚貝が殻を閉じて産卵管が挟まってしまうので、1秒に満たないほどの早業である。産卵直後に雄は入水管から精子を吸い込ませ、貝に産み付けられた卵に授精させる。このような習性を持っているために、タナゴを移動しなくても卵が産み付けられた貝を移動することで分布が広がることが示唆され、特に淡水真珠を作るイケチョウガイではその移動に伴って分布を広げたことが指摘されている。

この様に分布を広げたタイリクバラタナゴは、ブラックバスやブルーギルのように他の魚種を捕食したり、攻撃する様なことはない。しかしながらタイリクバラタナゴが移植された水域ではいくつかの問題が生じている。一つは、西日本に分布している在来のニッポンバラタナゴとの交雑である。双方は亜種であるために交雑しても生殖能力を失わず、次の世代を産むことができる。そのために純系のニッポンバラタナゴがいなくなった地域も少なくない。また、東日本では、ミヤコタナゴという種類の生息地にタイリクバラタナゴが入り込むと、数年でミヤコタナゴが駆逐されタイリクバラタナゴのみになってしまうことが確認されている。このメカニズムはまだわかっていないが、現在、研究室でその原因を究明している。

これらの原因で分布を広げてきたタイリクバラタナゴであるが、現在では、ペットショップでも販売され、それを購入した人が飼育しきれなくなって自然界へ放流することでも分布を広げている。静岡県ではタイリクバラタナゴによる在来種の直接的な被害の報告はないが、外来種であることには変わりない。繁殖期の雄はとても綺麗で鑑賞価値が高いため各地で販売されているが、決して自然界へは放流しないようにしてもらいたい。

対馬の鳥獣と対馬野生生物保護センター

三宅 隆



対馬野生生物保護センター



ツシマテンのロードキル



飼育されているツシマヤマネコの「福馬」



ライトセンサスで見られるツシマジカ

5月10日より5日間対馬を訪れました。対馬は、福岡の博多港から高速船のジェットフォイルで2時間余で着く、日本で3番目に大きな島です。韓国へは船でなんと1時間とのこと。まさに国境の島であり、韓国の旅行者も多いようです。この対馬、春秋の野鳥の渡り時期には、その中継地となり、本土では珍しい鳥たちが見られることで有名です。残念ながら、主目的の野鳥は、ここ数年、飛来数が少ないようで、期待したほど種類は見られませんでした。ホオジロ類やツメナガセキレイ類、コウライウグイスなどいくつかの珍鳥に巡り合えました。

この旅行中、上対馬の佐護にある環境省の対馬野生生物保護センターを見学しました。対馬では、ベンガルヤマネコの亜種で、天然記念物のツシマヤマネコが生息していますが、今では100頭前後に減少しており、絶滅が危惧されています。このセンターでは、ヤマネコを始め、対馬に生息する動物たちのパネルやジオラマが展示されており、解説員の説明でゆっくり見学することができます。またヤマネコの保護増殖活動も進められており、ここで飼育されているヤマネコも観察できます。センターの周辺は自然観察の場所として整備され、多くの野鳥などが見られます。時期にはヤマショウビンも見られるようです。

対馬では、ヤマネコを始めとして、ロードキルが発生することも多く、実際、今回の旅行中、同じく天然記念物であるツシマテンの事故死を目撃しました。また、ツシマジカやイノシシが増加しており、被害も多発しているようで、夜間行ったライトセンサスでもツシマジカのあまりの多さにびっくりしました。特有の生物の多いこの対馬を、どのように守り、人と共存していけるか、多くの課題があるようです。

駿河湾の深海魚 (6)
スイトウハダカ (その1)

久保田 正・佐藤 武

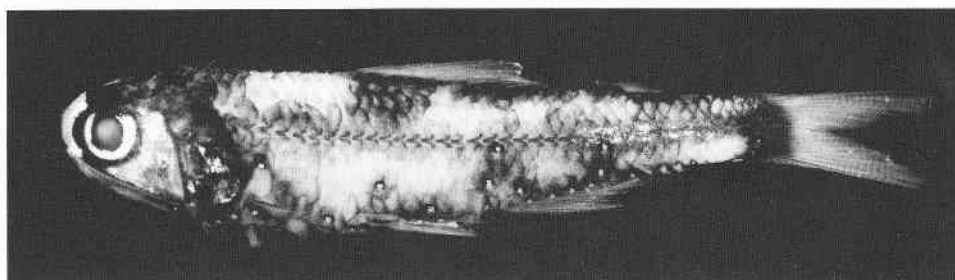


図1 スイトウハダカ サクラエビ網混獲 体長 113.0mm

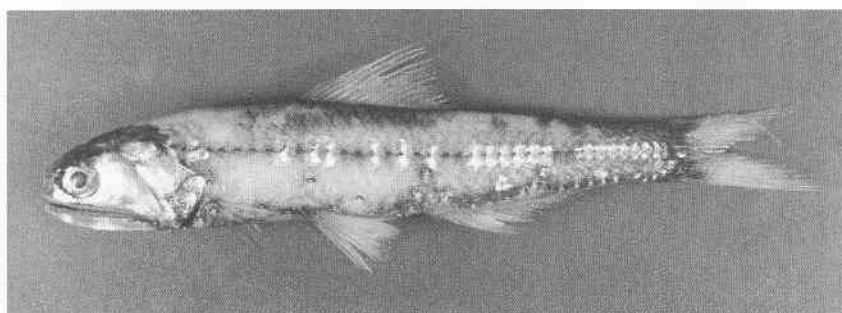


図2 ハダカイワシ サクラエビ網混獲 体長 132.5mm

スイトウハダカ *Diaphus gigas* は、ハダカイワシ科ハダカイワシ属魚類に含まれる1種であり、その分布は北太平洋の温帯域です。また、本種は中層上昇群に含まれ、昼間の生息層は500～700m層で、夜間には60～400m層に上昇して明け方には再び深い層に戻るという日周鉛直移動を繰り返しています。1906(明治39)年秋季にアメリカの調査船アルバトロス号によって相模湾から採集された標本(体長140～210mm)に基づいて魚類学者のギルバート(C.H.Gilbert)が、1913(大正2)年に駿河湾から得た他のハダカイワシ類とともに新種として発表しました。本種の種小名の *gigas* は、ラテン語で巨大という意味です。駿河湾内で行われているサクラエビ漁で混獲されるハダカイワシ類の中でも本種は、他の種に比べて、頭部先端にある大型の眼前発光器を持ち、体は大きく円筒状(体長100～160mm)なので非常に目立つ存在です(図1)。

本種が捕食した餌料生物について、駿河湾奥部海域(田子の浦沖、由比沖、三保沖)で操業のサクラエビ漁で混獲された157個体(体長102～162mm)の胃内容物を調べました。雌が152個体そして雄が5個体でした。餌料

生物は、サクラエビ、介形類、オキアミ類、イカ類、魚類など5生物群がみられ、調査個体数の75.8%がサクラエビを捕食していました。以下、多い順に魚類(12.7%)、オキアミ類(4.5%)、イカ類(1.3%)、介形類(0.6%)でした。また、本種の捕食重量の平均は、0.68gであり、空胃率は、17.2%(27個体)でした。さらに捕食率{(胃内容物重量/魚体重)×100}は、1.5～2.5%の階級(平均2.1%)に含まれる個体が多かったのですが、7.0%以上の階級に含まれて多量に捕食している個体も少なくありませんでした。

駿河湾内の本種が好んで捕食する餌料生物は、サクラエビです。このサクラエビ漁でエビと混獲されるハダカイワシ類の中では最も数多くのサクラエビを食べています。駿河湾内で似たような捕食傾向にある種類は、やはりサクラエビと混獲される大型種のハダカイワシ *Diaphus watasei* です(図2)。前報(第36号p.9)のススキハダカの食性で述べたように、当湾内の多くのハダカイワシ類は、それぞれの体の大きさに応じた大きさの甲殻類プランクトンをおもな餌料としています。

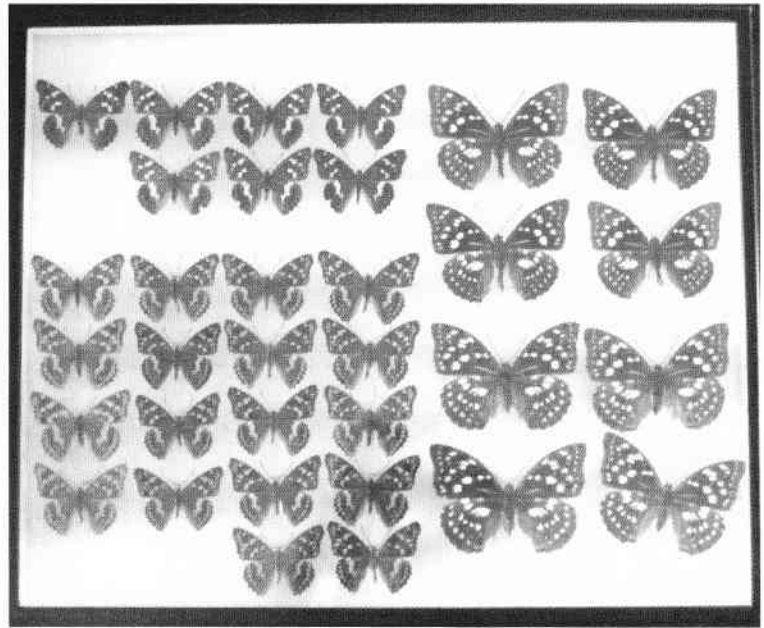
コレクション紹介
小澤 至氏の蝶類標本について
高橋真弓



小澤 至さん（左）とともに

昨年の秋、私の大学時代の友人から、町田市在住の知人小澤 至氏の蝶類標本を保管するための適当な施設はないかとの相談を受けた。これを機会に受け入れ可能かどうかを検討した結果、将来の県立自然史博物館収蔵資料とするため、静岡県自然学習資料センターに保管することになった。標本箱 113、個体数は約 8000 頭となる。小澤さんは、少年時代を長野県諏訪市で過ごされ、標本の中には 1944 年 7 月 3 日に採集されたウラミアカシジミや 1949 年 6 月 14 日に採集されたウラキンシジミなどが含まれている。当時の諏訪市郷ノ沢はミドリシジミ類をはじめ、おどろくほど蝶相の豊かなところであつたらしく、この場所については浜 栄一著「チョウの昼と夜」でも詳しくとり上げられている。

小澤さんはその後、東京都に移住され、定年退職後も蝶の採集を続けられ、その範囲は北海道から沖縄にかけての全国的な規模となった。静岡県のものとしては 1969 年 4 月 1 日に富士宮市沼久保で採集されたギフチョウ（同地では、1970 年代に絶滅した）などの標本がある。



小澤 至氏蝶類標本
コムラサキ（左）とオオムラサキ（右）

東京都町田市山崎町のご自宅の近くには、1970-80 年代にかけて“里山の蝶”の生息に適した雑木林があり、ここで採集されたオオミドリシジミやオオムラサキの標本が保存され、これらの標本はかつての武蔵野の自然を物語るものとしての貴重な価値をもつ。

小澤さんの標本は 1 頭ずつ丁寧に仕上げられ、ラベルの記載もほぼ完璧であるので、資料としての価値は高い。蝶の同定も極めて正確で、たとえば一見識別の難しいサトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲも正確に同定され、しかも季節型まで明示されている。

私は小澤さんのご自宅を訪問し、初対面ではあつたが、ご療養中とはいえ、蝶の話をされるときは本当に楽しそうであつた。何はともあれ、健康のご回復を心からお祈りするしだいである。

自然史を活かした空間づくり

袋井市の宇刈里山公園

延原尊美



宇刈里山公園入口の地層展示



大日層の貝化石入り岩石ブロックの展示

袋井市宇刈には、ホタルの飛び交う自然と、宇刈神社をはじめとする歴史遺産や風習など、古き良き里山の自然と文化の息づかいが残っています。また、その里山の地盤は、約200万年前に浅海で堆積した砂や泥の地層（大日層や宇刈層）からなり、学術的にも重要な貝化石を多く産出します。

このような里山の魅力を活かした「宇刈里山公園」が5月にオープンしました。東名袋井ICから車で15分、宇刈川沿いを北上した里山丘陵の中にあります。周囲の樹木を残した山肌に囲まれた4つの広場からなり、自然景観を活かした形で整備されました。

宇刈里山公園のユニークな点は、里山の自然史に親しめるよう、さまざまな「実物」を保全・展示して工夫を凝らしていることです。入口近くには、工事中にあらわれた地層（宇刈層）の断面をコーティングして保全し、公園地下の様子や大地の成り立ちを実感できます。貝化石密集層やハンモック状斜交層理、断層も観察でき、地学教材としても活用できます。看板には、目の前の地層断面と対応させて観察ポイントが示されています。

芝生広場の北側には、貝化石の密集する砂

礫岩の岩体が並べて展示されています。これらは大日層から採集してきたもので、日本が亜熱帯気候にあった時に浅海に生きていた絶滅種を多く含んでいます。看板には温暖化を示す貝化石の意義とともに、化石がどのように地層に含まれていて、そこから何が読み取れるのかも説明されています。

芝生公園の南にはせせらぎがあり、ホタルの生態や生息環境について解説があり、宇刈川源流地域の自然の魅力や大切さを語っています。またその近くには、「生きている化石」として有名なメタセコイアが植樹されています。メタセコイアの解説とともに、里山公園から産出した植物化石も説明されています。200万年前の温暖湿潤な林から現在の里山につながるまでの歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか？

袋井市はウォーキングが盛んなまちですが、公園の周囲には、自然や歴史をめぐる4つのコースが公園案内に紹介されています。公園を起点に、自然史のおもしろさを地元で誇りをもって共有できるよう、今後も応援したいと思います。

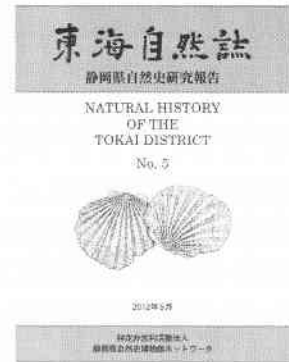
「東海自然誌」第5号が発行されました！

東海自然誌編集委員会

NPO 自然博ネットの自然史研究報告である「東海自然誌」の第5号(70ページ)が2012年5月31日に発行されました。「東海自然誌」は、NPO 自然博ネットのホームページに第1号から最新号までpdfファイルで掲載してありますので、閲覧やダウンロードができます。

ご希望の会員には、1冊送料込1000円にて頒布いたしますので、郵便振替(振替口座番号:00860-8-56970、口座名:自然博ネット)で冊数と送付住所氏名を明記して冊数分を入金してください。

なお、第6号の投稿募集については、原稿締切期日を10月20日とします。静岡県自然史に関する発見や記録などの資料や短報などを、是非多くの方に投稿していただきたく、お願い申し上げます。



[原著論文]

「田辺 積氏化石コレクション」にみられる鮮新更新統掛川層群産軟体動物化石群集と化石密集層の形成要因・・・1
柴 正博・石川智美・横山謙二・田辺 積

[短 報]

静岡県沼津市新中川で採集されたタメトモハゼ・・・31
北原佳郎・加藤健一・岡部 剛
静岡県三島市松毛川におけるクサガメとミナミイシガメの交雑個体の記録・・・35
加藤英明・森 万希子・斉 冬至・衛藤英男
静岡県狩野川水系におけるカミツキガメ *Chelydra serpentina* (Testudines, Chelidridae) の定着・・・41
加藤英明・衛藤英男

[資 料]

静岡県掛川市下俣の掛川層群最上部より産する前期更新世の軟体動物化石・・・45
延原尊美・北村孔志
静岡県中西部のコウモリ類・・・51
佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己

問合わせ先および投稿先

〒424-0806 静岡市清水区辻 4-4-17
静岡県自然学習資料センター内
NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク事務所
Tel & Fax: 054-367-2111
投稿規定 http://www.spmnh.jp/inform/nhsr_edguid.pdf

特別展「日本の蝶と自然」

NPO 自然博ネット・静岡県共催

このセンターに収蔵されている約5万点のチョウの標本の中から、日本各地に生息するチョウの仲間を紹介します。静岡県内で普通に見られるチョウや県外のみごとで美しいチョウたちをご覧ください。

開催期間:平成24年8月11日(土)~8月31日(金)

開催場所:静岡県自然学習資料センター
3階 展示室

開催時間:午前10時から午後4時まで



会場案内図